

近世後期の立山参詣記録にみる名所意識

高木 三郎

はじめに

江戸時代になると寺社・霊山参詣という宗教活動が庶民層へも拡大した。特に19世紀に入ると全国的な隆盛を見せ、立山においても文化・文政期以降、参詣者が急増した¹⁾。寺社参詣史の研究については、これまで数多くの研究があるが、新城常三氏の『新稿社寺参詣の社会経済史的研究』が金字塔的な役割を果たしたといわれる。新城氏は、同書で、近世に入って参詣者が急増した要因の一つとして、「交通環境の改善により、旅の苦行性は希薄化し、旅は楽になり、参詣量は上昇するが、さらに進んでほしいに楽しい旅が実現されるようになる。ここに旅自体を楽しむ行楽の旅、観光の旅が生まれ発達する」²⁾と述べ、立山参詣者が急増した理由についても、「出羽三山や立山参詣等が、中世的な霊山信仰の実を半ば失い、遊山化・スポーツ化していたことは疑われず、かかる変質によってこそ、年々数千人の登山者を迎え得たのである」³⁾とし、立山でも物見遊山化が進んだと指摘した。しかし、立山の地元では、「立山に一ぺん詣らんもの陀羅、二度登るもの陀羅」⁴⁾という方言があり、立山は、一度は登らなければならないが、恐ろしく辛いので普通の者なら二度登ることはないと言われてきた山である。立山参詣は、江戸時代に入ってもなお多くの苦行が伴い物見遊山にも限界があったのではないだろうか。

一方、福江充氏は、19世紀以降の立山への参詣者急増について、女性や老人の参詣者が急増したとし、「こうした人々にとっては、禅定登山ではなく、例えば、立山開山慈興上人の廟所があり立山大権現が勧請された山麓の霊場芦峠寺に参詣すること、或

いはそこで行われる祭礼に参詣・結縁することにこそ重要な意義があった」⁵⁾と、布橋灌頂会や立山大権現祭への参詣者が増えたと指摘している。たしかにこのような側面もあつただろうが、禅定登山も増えていることは、各参詣記録からも読み取れる。例えば、富山藩士で漢学者でもあつた大塚敬業は、天保11(1840)年に立山禅定登山を行って『登立山記』を刊行しているが、同書に「士民ノ別無ク宿(室堂)者填满」⁶⁾との記載が見られ、当時の登拝の隆盛が窺われる。

近年、原淳一郎氏が『近世寺社参詣の研究』を著し、その中で、新城氏の指摘した近世の寺社参詣における物見遊山化の高揚という問題に対して、「かかる傾向は寺社参詣の変容の一形態として捉えていくのが妥当であろう。なぜなら、自然美や知的充足感の探求が最終目的であろうとも、その対象の多くは寺社の域内に形成され、あるいはその過程に寺社参詣を並存させているからである。したがって完全に二元論として考察するよりも、いかに寺社参詣が変容し、いかなる場面で物見遊山的な要素が強まり、いかなる側面で信仰的要素が保持されあるいは逆に強められているのかを議論する方が有益であろう」⁷⁾とし、相模大山等を例に参詣者意識の変容過程等を詳細に論じ、多くの示唆に富む指摘をしている。

本稿では、山麓で終わる参詣でなく、峰本社への参詣の中に、物見遊山的な要素と信仰的要素がどのようにみられるのかを、具体的に検証しようとするものである。その際に重要となる資料が道中日記で

あろう。これまで、道中日記は旅の経費等を割り出すという社会経済史的関心や径路復元の研究に利用されることが多かったが⁸⁾、本稿では参詣者の意識を探るために利用しようとするものである。

立山に関わる道中日記研究は少ないように思われる。野口安嗣氏は、種々の参詣記録から立山参詣の費用を算出し、立山参詣が当時いかに高価な旅行であったかを明らかにしている⁹⁾。これは、立山参詣を社会経済史的の面から論じた画期的研究といえよう。加藤基樹氏は、尾張藩士某が著した『三つの山巡』を素材にして立山・白山・富士山の三禅定という苦行を実践する近世人の心を考察している¹⁰⁾。しかし、このほかに道中日記を利用した研究は見当たらない。たしかに、立山においても今までいくつもの道中日記が紹介されている¹¹⁾。しかし、これらは個別の事例としてしか扱われてこなかったのではないだろうか。本稿では、近世の道中日記を同一の視点から分析し、参詣者にみられる意識の傾向を探り出そうとするものである。

分析対象とする資料は11点と少なく、しかも作者はほとんどが知識人とよばれる人々である。参詣者のなかで最も多くを占めていた庶民層はほとんど記録を残していない。したがって、参詣者の全体的な傾向を推測することは不可能であるだけでなく、知識人と庶民では、寺社に対する接し方が違うことに

留意しなければならない。その理由の一つとして、知的背景の違いがある。すなわち、武士を主とする知識人は藩校で儒教の教養を身につけたのに対して、庶民は寺子屋で教育を受けていたこともあり仏教思想の影響を受けていた。仏教的習俗やそれと交流している民間信仰が庶民の心をとらえていたのに対し、儒教では世俗的価値を宗教的価値よりも上におく態度がみられ、江戸時代に知識人の知的関心が仏教から儒教へ転換したことにより、知識人と庶民の発想様式の間には亀裂が生まれたと指摘する学者もいる¹²⁾。また、原氏も、知識人と庶民の旅には本質的に大きな違いがあるとして、「彼ら(文人)の場合、それ(旅)が和歌修養の道であれ、歴史的考証のためであれ、知的好奇心に端を発していることが多い。稀に山岳登山をする者もいるが、本来、信仰のためや共同体維持のためではない」¹³⁾とか、「俗的な知や古い慣習に厳しく、きわめて近代的・合理的な考えを見せる人が多い」¹⁴⁾などと指摘している。

参詣記録を残している人々は、これから登る人へのアドバイスという意識で記録をとっていることが多い。出版物の刊行がまだ少ない時代にあって、これらの記録は貴重な情報源となったことが考えられる。そういう意味で、後世への影響力も考えると、これらの限られた資料を分析することにも意味があると思われる。

1. 参詣記録の分析方法

旅の記録を道中日記とか紀行文ということがあるが、本稿で取り上げるものは記載が少なく紀行文といえないものもある一方で、和歌を多数記すなど名文といわれる紀行文もある。そのため、本稿ではこれらをまとめて参詣記録とよぶことにする。

1-1. 対象とする参詣記録について

本稿では、参詣者が急増する19世紀前後以降に書

かれたもので、少なくとも峰本社登頂までを記した参詣記録を対象とし、次の11点を取り上げることにする。

① 佐藤季昌 『立山紀行』¹⁵⁾

佐藤は富山藩公前田氏に仕えて藩医と歌道方をつとめ、富山における古学、和歌の始祖といわれる。紀行のはじめに述べているように、京に遊び、東国

に旅し、九州の果てまでも行脚した、旅行好きの文人である。天明のころ立山登山を行い、10余年後の寛政10年（1798）その旧稿を公にした。登山の動機は、「若かりしより、思いたつことあまたたびなれど…」未だ念願実現の機会がない。いまや、「いそぢにも四つ五つたらぬ身にまで」になったが、このたび誘う人があって実現したとあり、45歳前後に登山したと思われる。文中に20余首の和歌をちりばめるとともに、「この御山に登らん人の為にくだくだしけれど（わずらわしいが）、跡先にかいつけぬ」と記し、この後登山をする人のために、少しでも多くの情報を伝えようとしたことがわかる¹⁶⁾。

② 海保青陵 書簡¹⁷⁾

海保は、江戸時代後期の経済学者として知られる人物である。丹後の宮津藩の家老角田市左衛門の子として江戸に生まれたが、学問の研究を志して家を譲り、曾祖父の姓海保を称した。三十余国を巡って経済を説いたが、その中に越中も含まれた。海保の越中滞留は文化3年（1806）の半年間で、52歳のときであった。その滞在中の文化3年7月に立山登山を行ったことが、門下生への書簡に記されている。彼はその中で地獄谷の硫黄などの開発に触れるとともに、6首の漢詩を作っており、印象深い登山であったことがわかる¹⁸⁾。

③ 野崎雅明 『立山ノ記』¹⁹⁾

野崎は富山藩士で宝暦7年（1757）頃の出生で、寛政5年（1793）に藩校広徳館の助教に、享和2年（1802）には学正となり、藩主利幹の家庭教師に任ぜられている。登山の動機は「名勝ヲ窮メント欲シテ」であり、文化9年（1812）6月25日より立山登山を行った。「帰りテ記ヲ為リ、以ツテ余ガ践履ヲ追フ者ヲ啓ク」とし、この後登山をする人を啓蒙するため記したい²⁰⁾。

④ 野田泉光院 『日本九峯修行日記』²¹⁾

野田は日向（現宮崎県）の修験者で、全国を旅してその行を『日本九峯修行日記』に記した。文化13年（1816）6月越中入りし、山開きを1週間早めてもらって立山登山を行った。季節が早く雪が多かったため谷や丘や行場を通らなかったため、かえって楽な登山となったようで、山中での感想も少ない²²⁾。

⑤ 尾張藩士某 『三ツの山巡』²³⁾

名を憚る事情があったと思われ筆者は不明である。年齢については、文章中に「四十歳以上可行所にあらず」という個所があり、40歳以上という年齢制限は、おそらく40歳を過ぎた我が身では、いかにつらく、いかに難所であったかという現場状況を吐露したものである。登山の動機は「加賀の白山、越中立山、駿河の富士、此の三ツの山を巡りたく、年頃日比望むといへども、仕官の身なれば、…願ふ事も成がたく打過しが、…時節到来して」とあり、三禅定が目的だったことがわかる。文政6年（1823）旅に出て、6月15日より立山登山を行っている²⁴⁾。

⑥ 尾張知多郡大府村平七 『三山道中記』²⁵⁾

文政6年（1823）6月、大府村の13人が51日を費やして白山、立山、富士山を巡歴したときの記録である。行程のメモ書き風の記録であるが、農民の集団旅行の実態を知る上で貴重である。また、仏教関係の記載が多く、典型的な信仰登山の様相が窺われる。

⑦ 上田作之丞 『老の路種』²⁶⁾

上田は加賀藩の学者で、年は定かではないが、「愚老立山に登らんと志す事数年、一時勝因を得て登山す」として立山登拝を果たした。天保6年（1835）冬から『老の路種』の序を著し、書中巻2に芦峯嬾堂に詣でた際の記録があり、巻5に「藤橋」及び「立山」と題する文を収めている²⁷⁾。

⑧ 大塚敬業 『登立山記』²⁸⁾

大塚は富山藩の漢学者で、江戸の昌平黌に学んで富山に帰った天保11年(1840)、「今茲に東遊より帰り、乃ち伴を結んで一遊せんとし」仲間を誘って立山登山を行った。下山後、漢文の『登立山記』を書き、弘化2年(1845)これを刊行した。立山に関する最初の出版書とされている²⁹⁾。当時、幕府の昌平黌には朱子学者の安積良斎あさか りんさいを中心とする山好きの学者グループがあり、大塚もそのメンバーであったといわれている³⁰⁾。

⑨ 作者未詳 『五ヶ山大牧入湯道之記』³¹⁾

これは、天保11年(1840)から同14年(1843)にかけての道中記十篇百丁である。弁当持ちなど従者が2, 3人いて、4年間に10回の道中ということから、商家の隠居身分の可能性が高い。記載内容はかなり詳しいが、単調である³²⁾。

⑩ 金子盤蝸 『立山遊記』³³⁾

金子家は代々儒者として加賀藩に仕えた家柄である。盤蝸は登山を好んだようで、本書の巻末に収録されている詩編の詞書きには、「余嘗テ富士ニ攀ル、今ヲ距ツコト二十餘年」とあるから若い頃富士山に登ったことがわかる。天保15年(1844)6月、52歳の時に榊原守郁と連れだって立山を登山し、『立山遊記』を書いた。さらに58歳にして白山登山も行っており、三山禅定を成就した人とみて間違いない。また、巻末に、「立山登山ニ携うへき諸品」を列挙しており、この後の登山者へのガイドブックとなることを企図していたと見られる³⁴⁾。

⑪ 榊原守郁 『立嶽登臨圖記』³⁵⁾

榊原は加賀藩士で、天保15年(1844)、30歳の時に家中の儒者金子盤蝸に同道して立山に登り、その8年後に『立嶽登臨圖記』を著した。彼が家督を相続したのは47歳の時であり、この時はまだ部屋住みの

時であった。本書の中心となるのは七面の絵図で、榊原は自分の歩いた経路に沿って、その見聞した所を細々と付記説明して、記録にとどめると同時に、後来の便宜に供すべく、この図記を作成したものと思われる³⁶⁾。

上記11名の内訳は、儒学者4名、経済学者1名、宗教者1名、文人1名、藩士2名、百姓1名、不詳1名となっており、知識人に分類される者が少なくとも9名である。「はじめに」でも述べたように、本稿では主に当時の知識人の立山参詣の意識を探ることになるといえよう。

1-2. 名所という視点

知識人や上流農民の立山への参詣意識を調べるにあたって、名所という観点から分析する。何故なら、寺社側は名所ということで宣伝活動を展開しており、それに対して参詣者側は実際に見ることによって、それぞれの名所に対する感想や意識が記述されていると考えられるからである。

近世に入って寺社の名所化が進んだといわれている。新城常三氏は、参詣者急増の要因の一つとして諸寺社の御師・宿坊の地盤の驚くべき拡大と、講の全国的普及をあげ、「それぞれの地域は、一御師の完全な独占的支配下にあることはむしろ稀で、幾多の御師が同一地域で旦那の取り合いを行っている」³⁷⁾と指摘している。激しい寺社間競争のなかで参詣者を増やすために、縁起に手を加えて御利益を新たに説いたり、参詣路を整備したり、名所旧跡の地として売り込む寺社が増えていった。白井哲哉氏は、近世に寺社が名所化する契機について鎌倉の事例を紹介して、「近世の寺社は、新たな外護者としての参詣者の獲得と、現世利益を求める民衆の受容という二つの事態への対応から、ある時期に名所化を志向し始めたと考えることができる。そしてそれは、宗門改の制度が確立した寛文期を含む17世紀後半ころと

の推定が可能である」としている³⁸⁾。

立山における名所化は、岩峯寺・芦峯寺衆徒が作成した「立山登山案内図」（以下、案内図と略す）から読み取ることができる。衆徒の間では「山絵図」と呼ばれ、両寺の立場によってその図柄の異なっている部分があるが、岩峯寺のものは「越中国立山禅定名所附図別当岩峯寺」と標記され、芦峯寺のものは「越中国立山禅定并略御縁起名所附図」と標記されており、両者に「名所」の語が入っている点で共通している。この案内図が、名所案内として作成されたことはほぼ確実であろう。なお、「名所」と標記のある最も古い案内図は享保7（1722）年のもので、立山参詣図としてあるいは立山信仰の縁起絵図として極めて完成度が高く、その後の案内図の多くはこの構図や図柄を踏襲している³⁹⁾。案内図は、両者とも、基本的な構図は次のとおりである。まず、立山連峰の雄山・大汝山・浄土山・別山・劔岳といった処峰の山並みがあり、山並みを境界として、その上方には空の空間、山並みの下方には山中の空間がある。そして山中の空間のさらに下方には山麓集落の空間がある。そして、それぞれの地域に、諸堂社や名所、尊体等の各種画像や、それにともなう文字注記等が書き込まれている。岩峯寺の案内図には立山略縁起の文言そのものが記載され、丁寧な名所案内の記載となっている。

案内図に記された文字注記がすべて名所として記されたとは断定できず、単なる目印の地点ということで記されているものもあるだろうが、ここでは名所を断定することが目的ではない。参詣者の意識を分析することが最終目的であり、そのための観点を取りだすことがここでの目的となるので、広めの範囲から観点を取りだしても問題はないと思われる。したがって、本稿では、案内図に記された名所や地名をすべて抜き出して、それぞれについて参詣記録にはどのように記されているのか調べていくことにする。

また、芦峯寺と岩峯寺では利害が対立することもあり、自領については詳細に記す一方で、相手側の領地については簡略化した内容となっているので、どちらか一つだけを取り出すのでは抜け落ちる部分が出る恐れがある。そのためここでは、芦峯寺の案内図と岩峯寺の案内図のどちらかに記されている名所や地名をすべて取り出すことにした。利用する案内図は、芦峯寺のものは「越中国立山禅定并略御縁起名所図」（立山博物館蔵、写真1）、岩峯寺のものは「越中国立山禅定名所附図別当岩峯寺」（富山県立図書館蔵、写真2）とした。どちらも、すでに代表的な案内図として紹介されているものである⁴⁰⁾。

なお、岩峯寺の案内図には、所々に説明文があるとともに立山略縁起の文言も記されている。これらに出てくる個所は、宗教者側が名所として強く意識していた個所と考えられる。そこで、表1にあるとおり、地名だけが記されている場合は△印を付し、説明がなされている場合には○印を付して区別することにした。

1-3. 分析方法

雑多な参詣記録を、同じ分析の俎上に載せるため、表1のとおり整理した。すなわち、案内図に記された名所や地名に対して、参詣記録の中で、地名だけまたは一言の説明で終わっている場合は△印を付した。一文程度の説明がなされている場合には○印を付した。一文程度としたのは、文章の切れが明確には判断できない場合があるためであり、内容的に一文と判断した場合には○印とした。二文以上の詳しい説明がなされている場合には◎印とした。また特に、作者の感想や和歌・漢詩が記されている場合には■印を付した。なお、表1では、◎と■の合計の多い順に並べ、印が全くつかなかった地名は紙面の都合上省略してある。

ほとんど印がつかないものがある一方で、■が数多くついているものもある。記載内容は参詣時の気

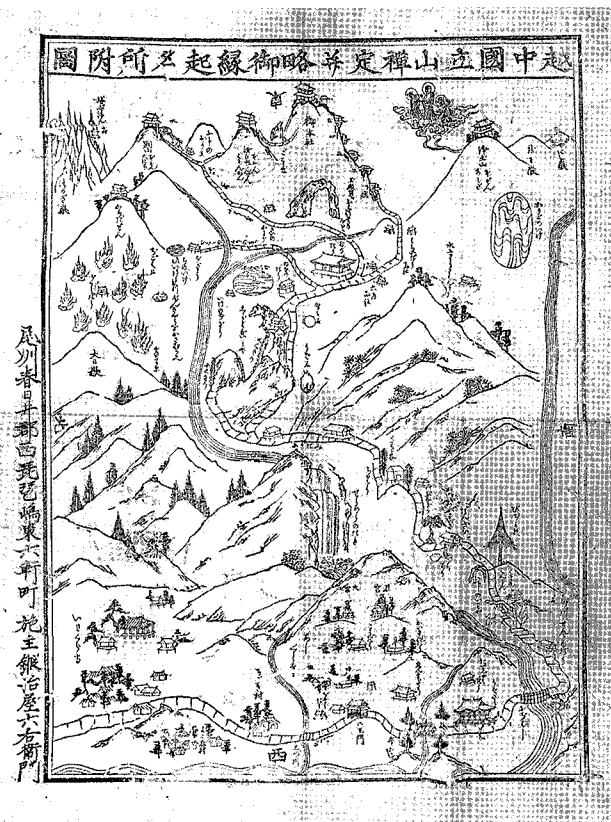


写真1 越中国立山禅定並略御縁起名所附図

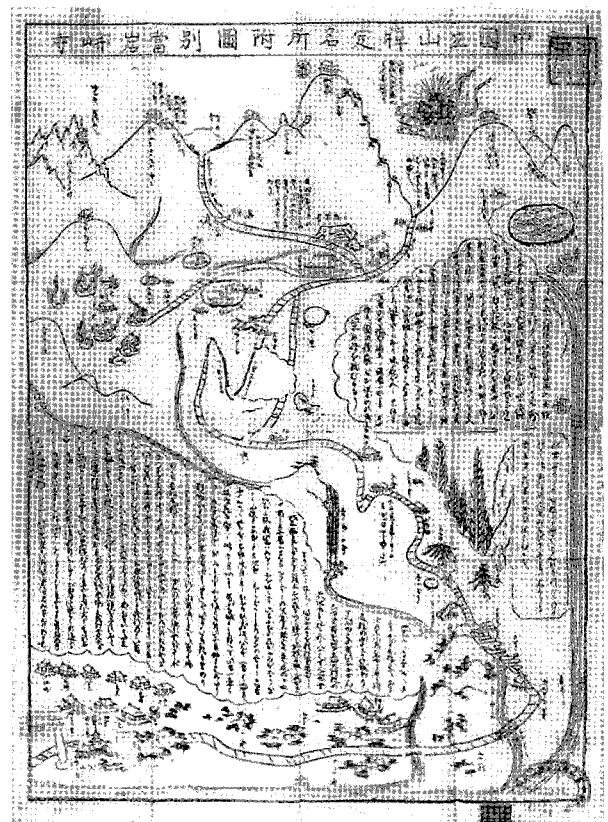


写真2 越中国立山禅定名所附図別当岩峠寺

象に大きく左右されることが推測できる。風雨に見舞われれば景色も見えず、旅の印象も悪くなることだろう。反対に、天候が良ければ雄大な自然景観への印象も強くなることだろう。また、案内する中語や衆徒の説明次第で印象も大きく変わるだろう。そういう不確定要素が多々あるので集計から安易な推測はできないが、ある場所に対して多くの◎や■がつくということは、強い興味関心が見られるということであり、何らかの傾向が読み取れる可能性がある。そこで、多くの◎や■がついた場所にはどのような記述がみられるのかを調べていくこととする。またその反対に、ほとんど印がついていないということは興味関心を引かなかったということであり、寺社側の意識と参詣者側の意識にずれがあることが予想される。

特に、岩峠寺の案内図で説明がなされている個所

は宗教者側が名所として強く意識していた個所と考えられるが、その説明と参詣記録の内容に差異がみられる場合は検討を加えてみたい。

なお、立山曼荼羅の唯一の絵解き台本と考えられている『立山手引草』の記載も参考とする⁴¹⁾。立山曼荼羅は立山信仰の布教道具であり、宗教者による立山の名所案内の機能も果たしているからである。また、『立山手引草』が岩峠寺衆徒による書であるのに対して、「芦峠寺の衆徒や仲語が登拝者の山道案内として長年に亘って語り続けてきた、伝承説話を昔のままに書い」たのが、佐伯幸長氏による「立山をめぐる伝承説話」である⁴²⁾。佐伯幸長氏は、芦峠寺雄山神社の宮司であり、芦峠寺衆徒の家系である。むろん異説や異伝が多くあることはいうまでもないが、宗教者の意識が表出されている資料として参考にしたい。

表 1 各参詣記録の名所記載状況

名所 (記載量多い順)	人物		佐藤季昌 (富山藩 歌道方)	海保青陵 (経済学 者)	野崎雅明 (富山藩 漢学者)	野田泉光 院(日向の 修験者)	尾張 藩士某	大府村平 七(尾張 の百姓)	上田作之 丞(加賀藩 儒学者)	大塚敬美 (富山藩 漢学者)	作者未詳 (商家の 隠居か)	金子盛綱 (加賀藩 漢学者)	榑原守郁 (加賀藩 士)	無	△	○	◎	■																						
	著書名																		立山紀行	書簡	立山ノ記	日本九峯 修行日記	三ツの山 巡	三山道中 記	老の路種	登山日記	五ヶ山大 牧入湯道 之記	立山遊記	立嶽登臨 圖記											
	登山年																													天明期 (1788頃)	文化3年 (1806)	文化9年 (1812)	文化13年 (1816)	文政6年 (1823)	文政6年 (1823)	天保6年 (1835) 以前	天保11年 (1840)	天保11年 (1840) ~同14	天保15年 (1844)	天保15年 (1844)
	岩峯寺 絵図	芦峯寺 絵図																																						
地獄谷	△	△	■	■	■	◎	■	◎	■	■	■	■	△	0	1	0	2	8																						
峰本社	○	△	■	■	■	◎	○	◎	■	■	◎	■	■	0	0	1	3	7																						
室堂	○	△	■	■	■	■	○	△	■	■	◎	■	△	0	2	1	1	7																						
岩峯寺	◎	△	■	■	◎	◎	■	○	■	◎	◎	■	■	3	0	1	4	3																						
藤橋	△	△	■	■	■	○	◎	△	■	■	○	○	△	0	2	3	1	5																						
称名滝	△	△	■	◎	■	■	◎	○	■	■	■	■	△	2	1	2	1	5																						
一の谷大鎖り	○	△	■	○	■	■	■	◎	○	◎	○	■	○	1	0	4	2	4																						
芦峯寺	△	△	■	■	◎	△	■	△	■	◎	◎	■	■	3	2	0	3	3																						
うば堂	○	△	◎	■	◎	○	◎	○	■	○	◎	■	○	1	0	5	3	2																						
一の越~五の越	○	△	■	■	■	○	■	○	■	△	○	■	△	2	2	3	0	4																						
剱岳	○	△	○	■	■	■	■	■	■	■	■	■	○	5	0	2	0	4																						
浄土山	△	○	■	■	■	■	△	△	■	■	■	■	○	4	2	1	0	4																						
材木坂	○	△	■	■	○	◎	◎	△	○	○	◎	■	○	2	1	4	2	2																						
弥陀ヶ原	○	△	■	■	○	○	○	○	○	■	○	■	○	2	0	6	0	3																						
獅子が鼻岩屋	○	△	■	■	■	△	△	○	■	○	○	■	○	5	0	3	0	3																						
別山	○	○	■	■	■	△	△	○	■	○	○	■	△	4	3	1	0	3																						
桑谷茶屋	○	△	■	■	△	○	○	○	△	△	○	◎	△	2	3	3	1	2																						
二の谷小鎖り	○	△	■	■	■	■	△	△	○	○	○	■	○	5	1	3	0	2																						
立山温泉	△	△	○	■	■	◎	◎	△	■	■	■	■	△	7	1	1	1	1																						
みくりが池	△	△	○	■	△	○	△	△	■	△	△	◎	△	5	4	0	1	1																						
血の池	△	○	○	■	△	○	△	△	■	△	◎	◎	△	5	2	2	2	0																						
布橋	△	△	○	■	○	○	◎	○	○	○	△	◎	△	6	1	2	2	0																						
美女杉	○	△	■	■	○	○	◎	○	○	○	○	○	○	6	0	4	0	1																						
畜生が原(鞍馬助)	○	△	■	■	○	○	△	△	○	○	○	○	○	7	1	2	0	1																						
大汝山	△	○	■	■	○	○	○	○	○	◎	○	○	○	7	0	3	1	0																						
ぶな坂	△	△	△	△	△	△	○	○	○	△	○	◎	△	4	4	2	1	0																						
姥石	○	△	◎	■	○	○	△	△	○	○	○	○	△	6	2	2	1	0																						
横江村	△	△	△	△	○	○	○	○	○	○	◎	△	△	7	2	1	1	0																						
千垣村	△	△	△	△	○	○	○	○	○	◎	◎	△	△	7	2	1	1	0																						
玉殿岩屋	△	△	■	■	○	○	○	○	△	△	◎	△	△	7	2	1	1	0																						
薬師岳	△	△	■	■	○	○	○	○	○	◎	◎	△	△	10	0	0	1	0																						
鏡石	○	△	△	△	○	○	△	△	○	○	○	○	△	3	4	4	0	0																						
しかりばり	○	△	△	△	○	○	○	○	○	○	○	○	△	6	1	4	0	0																						
かむろ杉	○	△	■	■	○	○	○	△	○	○	○	○	△	6	2	3	0	0																						
追分	○	△	■	■	○	○	○	△	○	○	○	○	△	7	1	3	0	0																						
みどりが池	△	△	■	■	△	○	○	○	△	△	△	○	△	5	4	2	0	0																						
鷲ヶ岩屋	△	△	■	■	○	○	△	○	○	△	△	○	△	7	2	2	0	0																						
刈込の池	△	△	■	■	○	○	○	○	△	△	△	○	△	7	3	1	0	0																						
千手観音堂	△	△	■	■	△	△	△	△	○	△	△	○	△	8	2	1	0	0																						
仁王門	△	△	■	■	○	○	○	○	△	△	△	○	△	9	1	1	0	0																						
断蔵坂	△	△	■	■	○	○	○	○	○	○	○	△	△	9	1	1	0	0																						
龍王岳	△	△	■	■	○	○	○	○	○	○	○	○	○	10	0	1	0	0																						
熊王権現	△	△	■	■	△	△	△	△	△	△	△	○	○	7	4	0	0	0																						
懺悔坂	△	△	■	■	○	○	○	△	△	△	△	△	△	8	3	0	0	0																						
大走り	△	△	■	■	△	△	△	△	△	△	△	△	△	8	3	0	0	0																						
小走り	△	△	■	■	△	△	△	△	△	△	△	△	△	8	3	0	0	0																						
不動堂	△	△	■	■	△	△	△	△	△	△	△	△	△	9	2	0	0	0																						
大日岳	△	△	■	■	○	○	○	○	△	△	△	△	△	9	2	0	0	0																						
糞の河原	△	△	■	■	○	○	○	○	△	△	△	△	△	9	2	0	0	0																						
地蔵堂	△	△	■	■	○	○	○	△	△	△	△	△	△	9	2	0	0	0																						
講堂	△	△	■	■	○	○	○	○	△	△	△	△	△	10	1	0	0	0																						
拝殿	△	△	■	■	○	○	○	○	△	△	△	△	△	10	1	0	0	0																						
鐘桜堂	△	△	■	■	○	○	○	○	△	△	△	△	△	10	1	0	0	0																						
神明	△	△	■	■	○	○	○	○	△	△	△	△	△	10	1	0	0	0																						
天神	△	△	■	■	○	○	○	○	△	△	△	△	△	10	1	0	0	0																						
八幡	△	△	■	■	○	○	○	○	△	△	△	△	△	10	1	0	0	0																						
若宮	△	△	■	■	○	○	○	○	△	△	△	△	△	10	1	0	0	0																						
有願堂	△	△	■	■	○	○	○	○	△	△	△	△	△	10	1	0	0	0																						
桑崎観音堂	△	△	■	■	○	○	○	○	△	△	△	△	△	10	1	0	0	0																						
鐘突堂	△	△	■	■	○	△	△	△	△	△	△	△	△	10	1	0	0	0																						
祓堂	△	△	■	■	○	○	○	○	△	△	△	△	△	10	1	0	0	0																						

注1) 左の欄は、岩峯寺絵図または芦峯寺絵図に記載されている地名を記載状況の多い(◎と■の合計数)順に並べたものである。ただし、参詣記録に記載のなかった地名は省略してある。
 注2) 芦峯寺絵図は「越中国立山禅定并略御縁起名所図」(立山博物館蔵)、岩峯寺絵図は「越中国立山禅定名所附図別当岩峯寺」(富山県立図書館蔵)である。
 注3) 記載状況により、4段階に分類した。名前のみか、記載があっても位置あるいは来歴が一言で説明されているものを△、由来や特徴が1文程度で説明されているものを○、2文以上にわたって詳細に説明されているものを◎、その中でも特に、著者の感想や意見が記されているものを■とした。
 注4) 右の欄の数字は、左の参詣記録(11点)に付された記号の合計数である。絵図の記号は含まない。

2. 記録者の名所意識

記録者たちの大半の登拝ルートは次のとおりであった。岩峯寺、芦峯寺などの立山信仰ゆかりの集落を通り抜け、藤蔓で編んだ藤橋で常願寺川を渡り、千寿が原につく。ここより材木坂などの急坂をよじ登って美女平に到達、ブナや立山杉が生い茂る森を抜け、弥陀ガ原に掛かる。その途中には、伏拝から称名滝を望み、桑谷茶屋で宿泊する者もいた。弥陀ガ原の奥に追分があり、右姥ガ懐道、左一ノ谷道で、ほぼ全員が登りに一ノ谷道、下りに姥ガ懐道を利用した。二ノ谷・一ノ谷は谷が深く落ち込み、鉄の大鎖小鎖につかまって切り立った崖をよじ登り、獅子ガ鼻の巨岩にたどりつく。このあと草原を過ぎて鏡石で姥ガ懐道と合し、室堂に至る。室堂に宿泊して翌朝、峰本社を参拝する。中には、浄土山・峰本社・別山と本格的に「三山かける」者もいた。そのときの都合により、その前後に地獄谷を見学し、姥ガ懐道を通して下山している。

立山山中の名所を、記録者の記述量の多い順に並べたものが表1である。多い順に、どのような記述がなされているか見ていくことにする。

2-1. 地獄谷

11名中10名に多くの記述量が見られ、立山山中で最も印象の強い場所だったことがわかる。地獄谷へは宗教者が引率し説教して回るようになっていたが、その反応は様々である。「先達の、『あれこそは何がし。これこそは叫喚、焦熱、阿鼻等の地獄、凡て百三十六』とぞ教えぬ。……いま思い出して、いとうおそろし」(佐藤)とか、「別当、是ニ於イテ八大地獄ヲ説き衆人ヲ脅威ス。駭怖、色ヲ失フ」(野崎)など、宗教者の説教により地獄の恐怖感を抱いている者が2名おり、地獄の連想まではいかないが、「聞きしに増りて恐るべきよそほひなり」(上田)と予想をはるかに上回る不気味さだと記したり、「臭気胸に

徹し、各鼻を掩って過ぐ」(大塚)と硫黄の臭さを記したりなど、景観の異様さを記している者は5名(海保・尾張藩士・上田・大塚・金子)いる。経済学者の海保は見学後に硫黄の資源開発を説くことになるが、その景観には「ヲソロシキ事言フ斗ナシ」と記している。また、その驚きは、数多くの地獄の列挙にも表れている。野崎は10種類の特徴を記し、平七は15の地獄名を記している。

一方では、水の色が様々に変化しているのは、「皆硫黄のせいにて斯色のかわる事成べし」(尾張藩士)と記したり、「余杖ヲ以テ池中ヲ探り試みニ試ムルニ冷水ニテ湯ニ非ス。去れ共、其の水色碧ヲ帯ぶレハ硫黄水ナルヘシ」(金子)と記すなど、科学者の態度でつぶさに観察している者もいる。

岩峯寺の案内図では、この個所について特に説明文はないが、火炎が10個描かれ地獄のイメージを強調している。記録者たちの多くは地獄までは連想しないが異様な景観として強く印象に残る場所だったといえよう。

一方で、「初メ八寒地獄ヨリ血ノ池ニ至ル迄僧色々ト地獄ノ妄説ヲ説キ、銭ヲ貪リテ甚だ退屈ス。」(金子)と宗教者の行動を批判している者もいる。また、地獄谷の血の池に関連して、岩峯寺の宿坊で血盆経を買うよう勧められたと記している者が2名(尾張藩士・金子)いる。血の池に血盆経を投げ入れると女性が救われるという信仰で、地獄谷は宗教者にとって重要な収入源ともなっていたことがわかるが、度を越えた説教で参詣者に呆れられる場合もあったようだ。

2-2. 峰本社

11名中10名に多くの記載量が見られる。1名が霧のため一寸先も見えなかったとして簡単な記載になっていることを考慮すると、印象度は極めて高い

といえる。

峰本社の記述内容は4つに分類できる。まず、富士山・白山・浅間山など多くの名山が眺望できることを記している者が5名（野田・大塚・未称・金子・榊原）いる。特に富士山が見えることに対する喜びは大きいようであり、「最も遠くして玲瓏秀徹、縹渺として南海の表なるは、即ち富嶽なり」（大塚）、「遙か二見へ渡りて其の殊勝言語に絶する事ナリ」（金子）、「富嶽は天際に顕わる。玉階下は翠簾を隔てて王侯に拝する如し」（榊原）などの表現がみられ、富士山への関心の高さが認められる。

2点目は、他よりぬきんで高い難所という思いである。「頂は方三丈ばかり、四方削るが如く、その望む所、浄土に比して更に雄豁たり」（大塚）といった表現がみられる。この感想は、一の越から五の越にかけての急峻な登りと切り離すことはできない。表1では「一の越～五の越」を別の名所の一つとして集計してあるが、そのほとんどの記述が、「磴道、空ニ梯スルガ如シ」（野崎）、「下ヲ下シ臨メバ目眩シ、足振ヒテ幾ト窮スル成」（金子）のような記述であり雄山での感想としてまとめることもできる。このような難所という感想を記している者は5名（大淀・佐藤・野崎・金子・大塚）である。なかには、「すべて一の越より五の越までは、此界をはなれたる有様なれば、拙き筆をとりて書き頭はさんは中々恐れあれば、もらしぬ」（佐藤）と霊山に対する恐れから書き記すことを控える者もある。

3点目は、そのような難所を乗り越えて登頂できた喜びである。「鬢のしもやうやうすずしき身をもて、かかる御山に登りし事の、いといたう有り難くて、ただ広前にひれふして泣く」（佐藤）、「天下眼下に有り。此の味ひ人の学業成就の地場に少しも異ならず」（上田）と2名が達成感の喜びを表現している。

4点目は、6名の者が宝物について詳細に記している（佐藤・野崎・平七・大塚・未詳・金子）。当時は宗教者が神宝として、「有頼、熊ヲ射シ矢ノ根、

「若狭老尼ノ額ノ角」、「北山石蔵ノロノ牙」などを披露しながら読経し因果の理を説いていたが、それに対して、「鬼ノ牙・老女ノ角、種々ノ物ヲ出シ、衆人ニ示シテ以ツテ徴ト為ス。是レ悪ヲ懲ラシ善ヲ勸ムルノ事ナリ」（野崎）と理解を示す者がいる一方、女の角というのは赤い曲玉、馬の角というのは白い曲玉であったとその正体を見破り、「捧腹に堪えず」（金子）と腹をかかえて笑う者もいた。

ところで、岩嶽寺の案内図では、峰本社の個所に、「此峰に禅頂し、百念仏の前に、弥陀来迎あり。」と記されているが、御来迎について記しているのは、「西の方ニむかいて 大日如来の御らいこう有」（平七）のみである。御来迎には、日の出とブロッケン現象の2つの現象が含まれている。雄山山頂部では、朝日が昇るとき、東が晴れていて西に霧がかかっていると、霧中に自分の影とそれを取り巻く美しい輪が見えることがある。これがブロッケン現象であるが、夏場は雄山と浄土山の山間あたりにこの不思議な自然現象がときどき見られる。おそらく、これがいつの頃からか極楽浄土からの阿弥陀如来の来迎に見立てられ、特別に信仰されるようになったのだろうという説がある⁴³。このめずらしい現象に出会えたのは平七と野崎だけである。野崎は浄土山でこの御来迎を見かけ、「霧中、又忽焉トシテ車輪ノ如クナル者ヲ生ズ。…是レ山中ニ所謂三尊来迎ナル者ナリ。…真ニ偉観ナリ」と記している。岩嶽寺の案内図では、御来迎についてだけ記され眺望については触れられていない。記録者たちはその御来迎をほとんど見ていないが、その眺望の素晴らしさには大いに満足しているといえよう。

また、寺社参詣の際には、禊^{みぎ}や垢離^{こり}など身体の穢れをとり身を清める潔斎儀礼を伴うことが多いが、このような宗教行為についてはどうだろうか。岩嶽寺の案内図には、一ノ越から五ノ越までを「はらへ堂方上、弥陀の妙体成」と記している。このように神聖な空間であるため、「立山手引草」に「拂ヒ堂此

ノ御手洗ニテ身ヲキヨメ」⁴⁴⁾とか、「立山をめぐる伝承説話」に「祓戸川で口手を清め草鞋を必ず履き替えねがならない」⁴⁵⁾と記され、潔斎儀礼が求められている。しかし、このような潔斎儀礼とみなされる記述は、平七の「五乃腰 これ方はきもの無用」の1か所だけであり、「はらへ堂方上、弥陀の妙体成」と意識していた者が多いとは思われない。

2-3. 室堂

次に印象の強いのが室堂で、■が7つ◎が1の計8名となっている。室堂に関する記述内容は2つに分類できる。1点目は、室堂平からの三山の景観で、特に夕映えの美しさを3名が記している。「山の姿は類ふべくもあらねど、夕日にうつろひて金をみあげたらんにひとしく」(佐藤)、「峯々、宛トシテ白瑠璃ノ如シ」(野崎)、「三峰高ク天外ニ聳へ、夕陽ニ映徹シ、山皆ナ銀色ヲ帯ヒ、其の見事ナル事言語ニ絶ス。実ニ人間世界ノ山色ニ非ズ」(金子)など、夕陽に染まる山の美しさが様々に表現されている。

2点目は、小屋の劣悪な環境への言及である。「人に士民の別なく、宿る者填満して、各々安寝を容さず。夜寒殊に甚だし。戸外に厠となすにより、便溺地に満ちて、衆氣悪むべし」(大塚)と記されているように、寒いこと、人が多くて鮭詰状態であること、戸外の人糞による悪臭のため睡眠できなかったことを記している者が6名(佐藤・野崎・野田・上田・大塚・金子)いる。中には佐藤のように、歌を詠みたくて立山に来たのだが、室堂ではうるさくて歌が詠めないと、目的を果たせないことに不満を記している者もいる。

宗教者側は室堂での宿泊について、「海拔高きが故に飯は半煮えで皆むぎいり粉で飢えを凌ぐ。これ餓鬼道の修行なりと説く。夜は喧しい上に猛烈な蚤の攻撃で身体中が真っ赤になる、寝られないのは修羅道の行」⁴⁶⁾と説いてきたが、食事や蚤について不満を記している者はいない。不満の内容として、人

の多さと人糞の悪臭をあげている者が多いが、これらは参詣者が増えるにつれてますます悪化するものである。寺社側の改善努力なしで修行といっても、知識人たちを納得させることはできなかったであろう。

また、「室堂には釈迦観音地藏の三尊が祀られ、夕べの勤行がある」⁴⁷⁾といわれているが、大塚が、「上に仏軀を置く。僧ありてこれを護る」と記す以外に仏や夕べの勤行に触れている者はいない。記録者の多くは室堂を宗教施設として見ていなかったといえよう。

2-4. 岩峯寺、芦峯寺、嬬堂

岩峯寺と芦峯寺は立山登拝の拠点集落であり、休憩宿泊場所でもあるので記載も多くみられ、◎と■の合計が、岩峯寺は7つ、芦峯寺は6つ、嬬堂は5つとなっている。

岩峯寺は山中での権利を持つために、山開きを早めてもらう交渉をしたとか(野田)、血の池に投じる血盆経を買わされたと記す者が2名いる(尾張藩士・金子)。またここで開山伝説を記す者も2名(佐藤・未詳)いる。一方で、「此坊不殘天台のよしなれども大かた妻帯也。立山へハ女人を厳敷禁。其守スル天台宗の僧、妻帯するもおかしき事也」(尾張藩士)とか、「午飯ス。僧ヨリ素麵酒ヲ出ス。カタ瓜ヲ水ニ浮かシ肴ニ進ム。何レモ食ニ堪ヘズ」(金子)と批判的な記述もある。

芦峯寺では、全員が嬬堂を見学しているようである。「立山へ参詣のもの先ズ此姥堂へ詣、此所にて色々教化いたし候事也」(尾張藩士)とか、「老姥堂ハ、文武天皇ノ御建立、勅願所也」(未詳)などの記載がみられ、嬬尊を慈興上人の母と記す者が3名(佐藤・野崎・大塚)いる。また、「大宝三年四月二日、慈興上人の母、江州志賀にて終りを遂げ給ふ。上人、悲しみにたへずして、みずから像をきざみて、慶雲元年八月葬礼の式をなし給ふより、いまに秋の

彼岸には、その折にたがはぬ執り行ひ、まめやかなり」(佐藤)や、「老姥神ハ春秋彼岸ニ祭礼有リ。此の時橋上ニ白布ヲシキ、神事有リ、……甚だイワレ有る事成」(金子)など、布橋灌頂会のことを記している者が2名いる。芦峠寺衆徒の布教活動の成果が出ているといえよう。

しかし一方で、宗教者による媯尊縁起の意味不明な説明に「区切あしくして、誠に意義分らず。……子どもの謡をくるが如く、何辺もくりかへし云ふうちに、思ひ出す体にて讀つぐなり。をかしさ云ふもさらなり。連立ちし人々大に笑い」(上田)したとか、「僧縁記ヲ講ス。甚だ長ク、聞くに堪えず。老姥神ノ木像正面ニ二三体有リ正座ス。……其の醜悪ナル事見るに堪えず。」(金子)など、宗教者の対応や媯尊像に不快感を示す者もいる。

媯堂は聖なる空間と考えられていたようで、「定め方こりおとり うば堂へ参り」(平七)とか、「橋下ニ小瀧ニ流有リ。……参詣ノ者此ニテ垢離スル也。其の後、老姥堂へ拝ス」(金子)と記す者がいるが、それ以外に垢離などの潔斎儀礼に触れている者はおらず、記録者からは聖なる空間という意識はあまり感じられない。

また、「宵の間過ぐる頃、客人あまた入り来りて立ちさわぐを聞けば……夜もすがら酔ひに酔ふて、果てはいきまきあらそうさま、あまりにはらあしきわざなれば、無礼の罪、たださばやとおもへど、明日は御山に参る身にしあれば、物ごとつつしみてこそと念じかえしぬ」(佐藤)と参詣帰りの宿泊客の喧騒に憤る記述や、「一村水甚だ悪シ。此のセツ井水皆涸レ溪流モ少なシ。濁水ヲ用ユ。」(金子)と飲料水への不満を記している者もいる。

2-5. 藤橋、一の谷大鎖り

藤橋は、千寿が原の手前の称名川にかかっていた吊橋で、前後に揺れて怖かったといわれている。「下は幾千尋ともしらぬ称名川、矢よりもはやく、漲る

波、巖に砕けて天を拍つの勢ひあり。橋は河風にさへ吹きなびきて、あやうさ、いはんかたなし」(佐藤)など、橋を渡るときの恐怖感を記している者が5名(佐藤・海保・野崎・上田・大塚)いる。登山道最初の難所だったために強く印象づけられたものと思われる。また、吊橋という橋の構造自体もめずらしかったようで、詳細に記している者もいる(尾張藩士)。

一の谷は、かつて修験者の行場として知られていた場所である。追分からの登山道は、一の谷を経由するルートと姥ガ懐道という単調な坂道があるが、江戸時代に入ってもなお、登りはあえて危険な一の谷を通過すべきとされてきた。これは、修験の山としての聖性を保つために維持されたものであろう。この一の谷大鎖りは、■が4つで◎が2つ計6名となっている。1名が多雪のため通らなかった以外は全員ここを通り、5名が危険の趣旨を記している。その中には、「眞ニ深谷ニテ樹根ニ倚り下ヲ臨メハ井中ヲ見ルガ如シ」(金子)、「眼ふたぎ手足戦慄^{おななき}からふじて屏沢に落ちきぬ」(大淀)、「此辺行場にて岩壁屏風を立たる如き、高四、五間斗の所にクサリ二筋垂、是を力に巖壁を登る。其危き事、言語に演がたし」(尾張藩士)、などとその怖さを表現している者がいる。さらには、「われら齢ひは百年の半ばに近き身にして、かかる深山をわけ登らんことは、事好のものとや人もわらふらめ。また行先もおしはかりて、悔しさやるかたなし。」(佐藤)と、ここで後悔の念を抱いたことを吐露する者もいる。知識人たちには、藤橋と一の谷の恐怖体験は強く印象に残ったようである。

記録者たちには一の谷を通過するにあたり修行の意識はあったのだろうか。「一の谷のたいないくぐりこりとり川あり」(平七)や、「此谷にて手水遣ふ事も。……此谷より流る水、わらじにさへつく事を禁」(尾張藩士某)など清浄さに関わる記述は2箇所見られるが、それ以外には見受けられず、記録者たちの

清浄さに対する意識はそれほど高いとは思われない。なかには、「此れニテ手洗い漱キ少シ人心チ(地)ス」(金子)と手洗いし口を漱ぐことでよい休憩になったと記す者もいる。清浄さへの意識が低いということは、この地を聖なる修行の地と捉えていないということであり、名所を知っておきたいという好奇心に発するルート通過と考えることができよう。

一方で、この場所は北の山陰になるため雪が遅くまで残りやすく、雪が見えることや冬のようにだと記している者が2名(大塚・金子)いる。山中に入り始めて雪をみる場所だったことも印象に残る要因となったのだろう。また、清らかな水の流れに感激して、「桃源郷にまよいてん」(佐藤)と記している者もいる。禅定道のなかで唯一の谷であり危険な谷を降り切ってほっと一息つくときに清らかな水に出会えたことで、このような印象も生まれたのであろう。

2-6. 称名滝、劔岳、浄土山

称名滝は■が5つ◎が1、劔岳と浄土山は■が4つ◎が0となっており、景観を感動的に記述している者が多い。

称名滝については、桑谷のあたり(伏拝みとも呼ぶ)から遠望できる。「林開ケテ始メテ瀑布ノ蒼崖ニ懸ルヲ見ル……是レ一山最勝ノ観ナリ」(野崎)や、「水白玉ノ如ク絶景ナリ」(未詳)など、ここから見える称名滝を絶景と記している者が5名(佐藤・野崎・大塚・未称・金子)いる。中には、「其の下の如何なるやを知らざるは、恨むべしとなす」(大塚)と下方部が見えないことを残念がる者もいる。その迫力もさることながら、杉木立の坂道をひたすら登ってきた参詣者にとって始めて視界がひらける場所で目にするだけに、印象も強かったと思われる。

劔岳については、「森然として直立すること、宛ら白刃相磨するが如し」(大塚)とそのおごそかで凜然とした山容を賛美したり、「巳ニ他山ノ擬スベキニ非ズ。雲霧開ク処、愈々秀ヅ。姿態万変、信ニ造

化ノ尤物ナリ。」(野崎)と雲霧により様々に変化する景観への感嘆を記すなど、その景観を印象深く記している者が4名(野崎・尾張藩士・大塚・金子)いる。「劔が嶽は今もかも罪人をおひ登すかとおもひ」(佐藤)というように地獄と結びつけて印象を記している者は1名だけである。

浄土山は、雄山・別山とあわせて三山とよび、この三山を縦走することを「三山かける」とよんでいた。この場合、最初に登る山が浄土山で、ここから最初に四方を見渡することができるために印象も強かったと思われる。大塚は白山・浅間山・乗鞍・富士山などを列挙し、「枚挙に暇あらずして、天下の壮观喜極まれり」と記している。他に、「道岩ノ積重リタル所有。甚難所成。ライ鳥居住ス。小鳥モ居ル。乾嵐寒ク肌ヲツラヌク。休ムニモ岩陰ナラデハ居難シ」(未称)、「此の路雪尤も多く、盛寒ノ時の如シ」(金子)というように、風の強さや雪の多さに難渋したという記述も見られる。

岩峠寺の案内図では、劔岳は「塔石あり。自然石なり」と説明書きがあり、針山地獄のイメージで描かれている。称名滝と浄土山について説明はないが、仏教に由来する名前である。記録者たちの中でそれらを宗教的感慨で記している者はほとんどいないが、その迫力ある景観は強く印象に残ったといえよう。

記録者を調べてみると、この3か所すべてで■となっている者は野崎・大塚・金子の3名で、この3名は特に山岳景観に対する興味関心が高いといえよう。

2-7. 材木坂

材木坂は、女人禁制伝説のある場所である。ここで女人禁制伝説に触れている者は3名(佐藤・尾張藩士某・未詳)であり、女人禁制伝説には触れないが、「実ニ四角ノ材木ヲ縦横ニ積立てタル如ク、甚ダ奇ナル石ナリ」(金子)のように奇石であることを記している者は3名(野崎・大塚・金子)いる。

岩峯寺の案内図では材木坂をはじめ、美女杉・しかりばり・かむろ杉・姥石・畜生が原・鏡石・玉殿岩屋という伝承説話で有名な個所について説明がなされているが、記録者たちの記載は極めて少ない。その中で最も印象の強い場所が材木坂であった。

2-8. 弥陀ヶ原、獅子が鼻岩屋、別山、桑谷茶屋

弥陀ヶ原、獅子が鼻岩屋、別山の3か所はいずれも■が3つで◎が0となっている。弥陀ヶ原は、杉林の坂道がとぎれて草原の平坦地となり、景観が一変して視界も開けるために印象に残りやすかったと思われる。佐藤はここで、「水無月を雪まになして若草の、もえいづる野べぞ世にもめづらし」と詠み、雪の冬、若草の春夏が同時に見られるのは珍しいと記している。他に「平原数里、最も遠望すべし。凡そ吾が越の山川景勝、一目瞭然たり。」(大塚)と下界が一望できることや、「一枚ノ青氈ヲ敷クニ異ル事ナシ」(金子)と一枚の青い毛氈のようだという記述が見られる。

獅子が鼻岩屋は一の谷の上方にあり、「此の辺絶嶮言語ニ絶ス」(金子)など、一の谷と同様な危険な個所として記されている。岩峯寺の案内図には、「弘法大師ごま修行のはい有」とあり有名な修行所として強調されているが、弘法大師の修行のところで記す者は3名おり、伝承の記載としては多い方である。

別山ではいずれも劔岳の迫力を記している。古来より劔岳は不入の山であり、別山は劔岳を遙拝する場所とされてきたが、「此ヨリ絶嶮、脚ヲ着クベカラズ。仰ギ見レバ攢峯峭拔、巉然トシテ霄漢ニ挿ム、是レ劔ガ峯ナリ。已ニ他山ノ擬スベキニ非ズ」(野崎)など、間近に見る劔岳は強く印象に残ったようである。別山まで足を踏み入れたと思われる者は5名であることを考慮すると、劔岳の印象度は高い。

岩峯寺の案内図では、別山については「帝釈の硯水池、七間十六間。有頼の具足あり」、弥陀ヶ原については「やくし如来の木石有」と記されるのみで景

観については触れられていないが、記録者たちには雄大な景観の方が印象に残ったといえよう。

この3箇所でも■となっている者は、佐藤・野崎・大塚・金子の4名だけであり、称名滝・劔岳・浄土山の場合とよく似た結果となっている。

桑谷茶屋は、■が2つで◎が1つとなっている。ここは、昼食休憩または宿泊場所として利用されていたので、印象に残る事も多かったのであろう。

2-9. その他

その他、特に指摘すべき個所として、岩峯寺の案内図で説明されている場所でありながら、記載が少ない場所をあげておきたい。

まずは、美女杉・しかりばり・かむろ杉・姥石・鏡石・畜生が原など伝承説話として知られている個所である。それぞれの伝説に触れている者は、鏡石については1名(作者未詳)、美女杉・しかりばり・かむろ杉は2名(作者未詳・尾張藩士某)、姥石・畜生が原も2名(佐藤・作者未詳)と少ない。伝説には触れていないが、美女杉が枯れていることを記している者が2名(野崎・金子)、鏡石の特徴的な形状に触れている者が3名(野崎・大塚・金子)おり、その特徴的な景観を記している者は複数名いる。美女杉・しかりばり・かむろ杉について、「一々妄説ヲ為ス。蓋シ流俗ノ附会ナリ」(野崎)とこれらをでたらめな話と記している者もいる。

開山伝説で重要な玉殿の岩屋については、「奥行十間程、内ニ蓮花石アリ。阿弥陀仏ノ金像安置、左リノ脇ニ矢ノ穴有」(未詳)、「廓然トシテ甚大ナリ。蓮華岩モ亦奇ナリ」(野崎)という記述の他、名前をあげている者が2名いるだけで、関心が低いといわざるを得ない。

2-10. 記録者の特徴

記録者を記載量の多い順に並べると表2のようになる。最上位の金子は、巻末に「立山登山に携うへき

諸品」を記していることから、立山登山のガイドブックの意味合いでこの本を書いていると考えられる。また、次位の佐藤も、峰本社の神宝の説明をしている個所で、「この御山に登らん人の為めにくだしけれど(わずらわしいが)、跡先にかいつけぬ」と記し、次の野崎も最後に、「以って余ガ踐履ヲ追フ者ヲ啓ク」と自分の踏み歩いた跡をたどる者を啓蒙するために書いたと記している。このように上位3名はいずれも、ガイドブックの意味合いで執筆しているため詳細な記述になったものと思われる。また大塚の『登立山記』は、立山に関する最初の出版物とされ、多分に読者を意識して書かれているものと思われる。

表2 11名の記載量順位表

	無	△	○	◎	■
金子盤嶋	0	0	1	0	15
佐藤季昌	2	0	1	1	12
野崎雅明	0	0	3	2	11
大塚敬業	0	1	3	3	9
尾張藩士某	1	2	4	3	6
作者未詳	1	0	6	6	3
上田作之丞	8	0	3	0	5
海保青陵	10	0	1	1	4
野田泉光院	7	2	3	3	1
大府村平七	2	5	6	3	0
榊原守郁	3	6	6	0	1

注1) この表は、表1をもとに記載量(◎と■の合計数)の多い筆者順に並べたものである。

またこの4名は、景観に対する記述が多いという点でも共通している。佐藤は、歌道方を務めていることから推測できるように、自然から伝承まで様々なものに対して旺盛な観察力を発揮している。金子・野崎・大塚は、山岳景観に対する関心が極めて高く、峰本社や浄土山からの眺望はもとより、劔岳の山容についても詳述している。前述したように金子は三禅定を成し遂げた人物とされ、大塚も富士山登山を行い、また北海道にも渡ろうとするなど遊歴を好む人物であった。山崎安治氏は『日本登山史新稿』の中で、「江戸時代にはすでに多くの人たちが、山の美しさ、すばらしさを知り、宗教的色彩を持たずに登山を登山として楽しむ風潮がみえはじめている」⁴⁸⁾として多くの人物を紹介しているが、彼らもそういう仲間に入るといえよう。

一方で、唯一の農民の記録と思われる平七の『三山道中記』には宗教関係の記述が多い。嬬堂では「定め方こりおとり うば堂へ参り」、一の谷では「一の谷のたいないくぐり こりとり川あり」、五乃腰では「五乃腰 これ方はきもの無用」と聖地での清浄行為がいくつも記されていたり、峰本社では「西の方ニむかいて 大日如来の御らいこう有」と記し、地獄谷では15の地獄名を記している。このように宗教的関心が強く認められる一方、景観に対する記述は見られない。信仰登山の典型ともいえる例である。1例をもって結論づけることはできないが、他の知識人との意識の相違が際立っている点は留意しておきたい。

3. まとめ

古来より立山は地獄と浄土のある山として知られ、立山略縁起にも共通して、「立山では峯に九品の浄土、谷に百三十六地獄がある」の文言がでてくるように、立山の地獄と浄土を象徴するのが地獄谷と立山の峰々である。近世後期には参詣道も整備された

とはいえ、依然として地獄谷や峰本社までの道のりは遠く険しく、劣悪な環境下での宿泊も伴うため、立山は安易な行楽気分では決して登れない山であった。唯一の農民の記録と思われる平七の『三山道中記』には、信仰登山の様相が色濃く見られる。また

佐藤の『立山紀行』には、「垢離とり、鬨伽むすびつつ、優婆塞の白きそうぞくして、白ゆふにかしらをつつみ、…」と白装束に身をまとった典型的な信仰登山者のことが記されており、立山が信仰登山の対象であり続けたことがわかる。

一方で、信仰登山とはいえない人々の参詣も見られるようになった。そういう人々の記録からは、地獄谷の異様な景観と、峰本社からの360度の大パノラマの眺望が、立山を代表する名所として特に印象に残ったことがわかる。彼らの中には、室堂からの三山の景観や称名滝・劔岳の景観などを印象深く記している者もあり、立山の山岳景観への強い好奇心や山岳趣味がみてとれる。彼らは、女人禁制などの伝承説話は受け入れないが、材木坂や鏡石などの特徴的な形状には興味関心をもって記述している。彼らの記録は、立山の類まれなる山岳景観を新たな視点

で紹介する先駆的役割を果たしたと言えるのではないだろうか。19世紀初頭には宗教者の思惑を超えて、立山の新たな名所意識が生れていたのである。

ところで、彼らが景観を楽しみ無事に旅を終えることができたのは、参詣道の整備と中語による案内があったからである。峰本社までの長い道のりには、宿泊施設や飲料水の確保など旅の安全を保障する環境整備と、退屈させない仕掛けが工夫されていたことと思われる。本稿ではそのような環境整備や様々な仕掛けなど宗教者側の取り組みを論じることはできなかったが、別途論じられなければならない重要なテーマであろう。

本稿はしかるべく研究方法や手法によらず誤読もあると思われる。先学諸賢のご叱正を頂ければ幸いである。

註

- 1) 福江充、『立山信仰と立山曼荼羅』、岩田書院、1998年、45頁
- 2) 新城常三、『新稿社寺参詣の社会経済史的研究』、塙書房、昭和57年、723頁
- 3) 新城常三前掲註2)、731頁
- 4) 佐伯幸長、「立山をめぐる伝承説話」(『山岳宗教史研究叢書10 白山・立山と北陸修験道』所収、名著出版、1977、274頁)
- 5) 福江充前掲註1)、45頁
- 6) 『登立山記』(高岡市立中央図書館蔵) 翻刻文は『越中紀行文集 越中資料集成10』(橋本龍也編、桂書房、1994、654頁)
- 7) 原淳一郎、『近世寺社参詣の研究』、思文閣出版、2007年、28～29頁
- 8) 原淳一郎前掲註7)、19～23頁
- 9) 野口安嗣、「江戸時代の立山参詣費用」(『富山県〔立山博物館〕研究紀要第19号』所収、富山県〔立山博物館〕、2012年)
- 10) 加藤基樹、「三禅定」考(『富山県〔立山博物館〕研究紀要第17号』所収、富山県〔立山博物館〕、2010年)「中世『三禅定』覚書」(『富山県立山博物館研究紀要第18号』所収、富山県〔立山博物館〕、2011年)
- 11) 広瀬誠、『立山のいぶき』、シー・エー・ピー、1992、113～136頁をはじめ、本稿で引用紹介している諸論考など
- 12) 湯浅泰雄、『日本人の宗教意識』、講談社学術文庫、1999、279～289頁
- 13) 原淳一郎、『江戸の寺社めぐり』、吉川弘文館、2011、97頁
- 14) 原淳一郎前掲註13)、96頁
- 15) 『立山紀行』(富山県立図書館蔵) 翻刻文は『肯構泉達録』(野崎雅章著、KNB興産、1974年、394～415頁所収)
- 16) 熊谷政男編著、『登山の夜明け』、朋文堂、1959、83～84頁
- 17) 『海保青陵書簡』(立山博物館蔵) 翻刻文は『海保青陵書簡の考察』、高瀬保、1992年、4～5頁所収
- 18) 高瀬重雄、『古代山岳信仰の史的考察』、角川書店、昭和44年、442頁
- 19) 『立山ノ記』(富山県立図書館蔵) 翻刻文は『肯構泉達録』(野崎雅章著、KNB興産、1974年、386～393頁所収)
- 20) 『越中紀行文集 越中資料集成10』(橋本龍也、桂書房、1994、492頁)
- 21) 『日本九峯修行日記』(宮崎県立図書館蔵) 翻刻文は『越中紀行文集 越中資料集成10』(橋本龍也、桂書房、1994、559～569頁所収)
- 22) 広瀬誠前掲註11)、123～124頁

- 23) 『三つの山巡』(国立国会図書館蔵)全文翻刻は加藤基樹「三禅定」(『富山県[立山博物館]研究紀要第17号』(富山県[立山博物館]、2010年、92頁～115頁所収)
- 24) 前掲註23)、89～99頁
- 25) 「富山県[立山博物館]平成7年度特別企画展 霊山巡詣 立山にみる遊・憂・悠」(富山県[立山博物館]、1995、48～49頁)
- 26) 『老の路種』(加越能叢書、金沢文化協会、1937年)
- 27) 広瀬誠前掲註11)、125～126頁
- 28) 『登立山記』(高岡市立中央図書館蔵)翻刻文は『越中紀行文集 越中資料集成10』(橋本龍也編、桂書房、1994、651～566頁所収)及び熊谷政男編著『登山の夜明け』(朋文堂、1959、179～185頁所収)本稿での引用は熊谷政男の翻刻を利用する)
- 29) 広瀬誠前掲註11)、131～133頁
- 30) 小泉武栄、『登山の誕生』、中公新書、2001、130頁
- 31) 『五ヶ山大牧入湯道之記』(金沢市立図書館蔵)翻刻文は『越中紀行文集 越中資料集成10』(橋本龍也編、桂書房、1994、658～709頁所収)
- 32) 前掲註31)、658頁
- 33) 『立山遊記・立嶽登臨圖記』(正橋剛二、桂書房、1995年)
- 34) 前掲註33)、73～74頁
- 35) 前掲註33)
- 36) 前掲註33)、80～99頁
- 37) 新城常三前掲註2)、761頁
- 38) 白井哲哉、「近世鎌倉寺社の再興と名所化」(『近世の宗教と社会1』)所収、吉川弘文館、2008年、273頁)
- 39) 米原寛、「富山県[立山博物館]平成24年度特別企画展 木版文化と立山」(富山県[立山博物館]、2012、45頁)
- 40) 芦峯寺の山絵図は、米原寛、「富山県[立山博物館]平成24年度特別企画展 木版文化と立山」(富山県[立山博物館]、2012、14頁)で紹介されている。岩峯寺の山絵図は、福江充、『富山県[立山博物館]研究紀要第14号』(富山県[立山博物館]、2007年、7頁～30頁)で紹介されている。
- 41) 林雅彦、『増補 日本の絵解き』、三弥井書房、1984、49～88頁
- 42) 佐伯幸長前掲註4)、263～278頁
- 43) 福江充、『立山曼荼羅』、法蔵館、2005年、74頁
- 44) 林雅彦前掲註41)、70頁
- 45) 佐伯幸長前掲註4)、274頁
- 46) 佐伯幸長前掲註4)、273頁
- 47) 佐伯幸長前掲註4)、273頁
- 48) 山崎安治氏、『日本登山史 新稿』、白水社、1986、185頁